

は現在の我々の心に十分の生命をもつて迫り、芭蕉や蕪村の作品は、現代の詩人の胸に、常に永遠の新らしさを與へてゐる。もし藝術が時代と共に進歩するものであると假定して、現代の俳句が、古句より數段勝つてゐるものであることを肯定するならば、それはやがて現代の俳句が一時的生命と價值としか持ち得ないことをも肯定しなければならぬであらう。何故といへば、將來のよりよき進歩をも肯定しなくてはならず、従つて將來に於ては現代の句も亦現代に於ける古句と同じ立場に立たざるを得ないからである。

とにかく藝術の價値は時代を超越して永遠に生命を持つところにある。不易といふのもそこまで抜けて來なければほんとうの不易ではなく、又俳句が常に進歩するものであるとすれば、俳句に不易の境涯はないわけであるから、何れにしても去來の「今は自他ともに此場にとゞまらず」といつたのは、謙遜にしては些か過ぎると思ふ。

『白^{ゆき} 雨^{あめ} や 戸^と 板^い お さ ゆ る 山^{やま} の 中^{なか} 助^{すけ} 童^{どう}』

去來曰、此句、初學の工案ながら句體風姿あり、語路滯らず、情ねばりなく事あたらし。最當時流行のたゞ中也。世上の句おほくは、兎する故に角こそあれと、句中にあたりあひ、或は目前をいふとて、すんど切の竹にとまりし燕、暖簾の下くゞる事のみなり。此兒、此下地ありてよき師に學ばゞ、いかばかりの作者にか至らむ。第一いまだ心中に理屈なき故なり。もし惡功^{わるざくみ}の出來たるにおよんでは、又いかばかりの無理いひになりなん、怖るべし。』

俳句にとつて理窟の如何に怖るべきものであるか、惡る巧みを忌み怖れた言葉の再三に止まらぬを見れば凡その見當がつかう。私は第一章に於いて、俳句が我々の理智に即すべきでなく、どこまでも感情に添つて行かねばならぬ所以

を明かにしたが、獨り俳句ばかりでなく、詩のすべてが一度理窟に墮ちたらおしまひである。助童の句は、句としてそれほどすぐれてゐるといふのではないが、ありのまゝの事實をありのまゝにすなほに觀察してゐる態度がよろしいので「語路滯ら」ぬのものその故であり、「情ねばり」ないのもその爲めである。「事あたらし」といふのは、自然そのものに正直に直面してゐるので、清新な境地を持つてゐるといふのである。理智を通して自然を見、若しくは自然を離れた理智の世界に閉ぢ籠つて、何かしら「意味」か「理窟」を見出さうとするやうな句には、この新らしさは求められないにも拘らず「世上の句おほくは」理窟に合せて句をつくらうとするから、「兎する故に角こそあれ」と想像をめぐらして辻褁を合せたり、新らしい事を強ひていひ出さうとするから、木に竹をついだやうなことにもなるのである。技巧の極致は技巧の全くないところにある。いかに巧みに表現しようかではなくて、いかに自然に表現しようかといふ點に、技巧のほんとうの意味がある。

『さ^さ び^び し^し さ^さ や 尻^{しつ} か ら 見^み た^た る 鹿^か の 形^{かたち} 木^き 導^{どう}』

許六曰、此句は「入る鹿のあと吹きおくる萩の上風」といへる等類也。去來曰、「吹送る」の歌は、朝鹿の山に歸る氣色をいへり。これは鹿一體のさびしさをいへり。趣意各別なり、等類なるまじ。

「入る鹿」の歌は、前にも引かれてゐた「明けぬとて野邊より山に入る鹿のあと吹き送る萩の上風」である。木導の句は鹿のうしろ姿に終始してゐる句で、なるほど去來のいふやうに等類にはならないであらう。

『唐黍にかげろふ軒や霊まつり』

酒堂

酒堂曰、路通いへるは、唐黍は粟にも稗にもふるべし、發句となしがたしと也。去來曰、路通いまだ句の花實をしらざる故也。此句は軒の草葉に火影のもれたる賤が魂祭を賦したる也。一句の實こゝにあり、其草葉は唐黍にても粟、稗、にても其場に叶ひたる物を用うべし、是は一句の花也。實は魂祭にて動くべからず、動けば外の句也。花はいくつも有るべし、其内雅なるを撰び用ふのみ。』

句の中心の思想を「實」とし、その中心思想を補ふべき點景を「花」としての見解である。しかし花であつても等閑に置かれたのでは句にならない。「花はいくつも有るべし、其内雅なるを撰び用ふのみ」といふ去來の言葉は、些か方便に過ぎる嫌がある。しかし「雅」といつても必ずしも美しいものばかりでなく、一句の「實」、即ち中心の思想に對して最も適切に添つたものでなくてはならない。「ふれる、ふれぬ」といふ事については、既に「つかみ合ふ子供の文や麥畠」の句の項で述べて置いたが、この酒堂の句も亦家居近く作られ易い唐黍だからこそ「軒」が利いて來るのであり而も「かげろふ」といふのも唐黍のたくましい廣葉だからこそ、必須的な力をもつてゐるのである。これを普通の畑ものとしての、そして唐黍に比べては弱々しい細葉の粟や稗にしてしまつては全く一句ぶちこはしになつてしまふ。路通の批難は、この句に對して甚だ同情のない、冷か過ぎる見方から出たので、句評といふものはよほど原句に同情を持たないと得てかういふ結果になり易い。又去來の花實の論もさることながら、「花」といひ「實」といひ、苟くも一句を形づくる上に必要な部分である以上、その何れに輕重があるといふことはいへないと思ふ。十七音の一音々に血が通つてゐて、どの音一つ突いても眞赤な血がほとばしる位、一句が緊密に仕立て上つてゐなければまだ上乘の句とはいへないのである。

『靈祭うまれぬさきの父戀し甘泉』

去來曰、吾子は出生已前に父を喪し給ふや。甘泉はいく、去々年送葬し侍る。去來曰、然ればこれは他人の句也。吾子に對してをかしからず。凡そ發句を吟するに、意は聖賢佛神の境にも遊ぶべし、處は禁裏、仙洞のうはさも申すべし、乞食桑門の上にもおよぶべし、句においては身上を出づべからず。身外を吟せばあしき害を求め侍らん。』
去來のこの言葉は匆卒に讀むと甚だ紛らはしい。即ち「發句を吟する」には他人の上に及んでもよいが「句においては身上を出づべからず」といつて、結局どちらが正しいのかはつきりしない。しかしこれは、句の上に想像や空想や理想を詠んでも一向差支へないが、自分の境涯だけは失つてはならないといふのであらう。聖賢佛神の境に遊び、雲の上人の噂をし、乞食桑門の上を思ひ遺つた句であつても、その影には作者自身の境涯が出てゐなければならぬ。況して一身上のことを詠んで、それが作者の身上から全く離れてしまつてはいけないといふのであらう。その意味で甘泉の句は全く謔をついてゐるので、「吾子に對してをかしからず」、即ち甘泉の句として甚だ面白くないのである。

『御命講やあたまの青き新比丘尼許六』

去來曰、七字斯くいひくださんはいかゞ、是を直さば一句しをり出來らん。許六曰、しをりは自然の事也、求めて作すべからず、是は七字を以つて發句となる也。其角もさこそと評し侍る。』

「御命講」は陰曆十月十三日、日蓮上人の忌日で、今の御會式である。その御命講に頭を青々と剃り立てた新米の尼が立交つてゐるといふ句意であるが、これに對して去來は、「あたまの青き」がよくない、これを「直さば一句しをり出で來らん」といつてゐる。この「しをり」の意味は、普通の用例とはよほど廣くなつて、餘韻とか餘情とか、即ち句の外の「しをり」の意であらう。即ち「あたまの青き」とはつきりいひ下してしまつては興が覺める、これを直してもつとさりげなくいひ表はせば言外に「しをり」が出て來るといふのであらう。又許六が「しをりは自然の事也」と答へてゐるのも同じ意味で、餘韻とか餘情とかは自然に出て來べきもので、殊更求めて作るものではないといつてゐるのである。これは確かに許六の説の方が正しい。

「門口や牛王めくられて初しぐれ

作者不知

去來曰、此句彦根より見せられたるに、其角が弱法師の門札の句と等類と評す。予(去來)甚だ誤なり、其頃は少し似たる事もけぼしく嫌ひ除きて、一句の物體をしらす。門といひ札といふにてはや等類の評をなせり、いと淺まし。

「牛王」は神社やお寺から出す護符の一種で、牛王寶印とか、牛王寶命など書いてあるお札である。句意は門口に貼つてある牛王のお札がめくられて、初時雨が降つてゐるといふのである。其角の弱法師の門札の句といふのは、『猿蓑』にある。

弱法師我が門ゆるせ餅の札

で、「弱法師」は乞食のこと、「餅の札」は江戸時代に非人どもが、餅搗きの祝に門々に立つて餅を貰つて歩いた、その貰つた家とまだ貰はない家と區別する爲めに、門の柱に札を貼つて置いたその札である。乞食たちよ、どうか私の門だけは餅の札を貼るのはゆるしてくれといふ句意であるが、なるほど「門口や」の句と比べて見ると、一向等類の疑はない。前者は時雨の景で、而も門に貼つた札がはがれかゝつてゐる眼前の句であるのに、後者は餅搗の景であつて、自分の家だけは貼つてくれるなといふ願望の句である。等類の詮鑿もいゝが、かう神經質になつても困ると思ふ。

「猪の鼻ぐすつかす西瓜哉 卯七

去來曰、させる事なし、三四分の句也。正秀曰、猪なればこそ鼻はぐすつかしけん甚だ悦びたり。其後先師も一興ありとなり。去來曰、退いて思ふに、此頃いまだ上方には西瓜めづらしければ、正秀もさおもふ心より猪のあやしみたるとは風情聞出だせり。予は西國うまれにて、西瓜も瓜、茄子のごとくさしてめづらしともおもはざりければ、曾てこゝろゆかさりけり。惣じて人の句をきくに、我がしる場としらざる場とにたがひ有るべし。虎の嘶を聞きて追はれたる人の汗をながしたりといへる類也。』

他人の句を味ふのに、自分の境涯にのみ即して輕々しく斷定的な批判を下してしまつてはいけない。味ふ者の趣味教養の高低深淺によつて、句の價值が著しく動搖するものであるから、自分自身の見方を最上のもとして無闇に批判し去ることは、時に自らの趣味教養の低さ、淺さを暴露する結果となる。去來は自ら告曰してゐるやうに最初はこの句に對して一向感心できなかったが、よく考へて見ると、長崎で生れた自分にとつて西瓜は一向珍らしくもないので、「猪

の鼻ぐすつかすといふのがさつぱり感興を引かなかつたのであるが、上方の人達にとつては當時まだ珍らしかつたのであるから、正秀も芭蕉も、すぐその感じが乗つたといふのである。西瓜は寛永年中に琉球へ渡り、慶安年中に始めて長崎で作つた。寛文年中には京・大阪へも上つたらしく、『八十翁疇昔話』に「昔は西瓜は、歴々小身とも喰ふ事なく、道辻番杯にて、切賣にするを、下々仲間など喰ふ事なり。町に賣ても喰ふ人なし。女などは勿論也。寛文の比より小身衆調へて喰ふ。夫より段々大身大名も喰ふ様になり、結構なる菓子になりぬ」とあり、又『關秘録』といふ書によると大阪の西瓜の赤いのは、犬の糞で作つたからで、これを喰ふと癩病になると信ぜられてゐたほどである。以て當時いかに西瓜が珍らしかつたかが察せられる。しかし去來が「正秀もさおもふ心より、猪のあやしみたるとは風情聞き出だせり」といつてゐるのは、餘りに觀察が微に過ぎて却つてどうかと思ふ。正秀は「猪なればこそ」といつてゐるので、西瓜なればこそとはいつてはゐない。又この句を猪が西瓜をあやしく思つて臭いでゐるものと見るのは些か突込み過ぎると思ふ。たゞ西瓜を食へるものかどうかといふ程度の、動物の本能から臭いでゐるので、そこに餘り深い意味を添へようとする、却つて情がねばり、句が重くなつてしまふであらう。「わたり猪の竹の子につく山家哉 浪花」と同じやうに、たゞ山家に於ける眼前の句と見て、軽く味つて置かねばこの句の面白味は失はれてしまふと思ふ。

「あさがほに箒うちしく男哉 風毛

魯町曰、此句或人の長點也、いかゞ。去來曰、發句といはゞいはれんのみ。杜年曰、先師の「葬に我はめしくふ男かな」とはいかなる所に秀拙ありや。去來曰、先師の句は其角が蓼くふ螢といへるにて、飽くまで巧みたる句の答

也。句上に事なし、答ふる所に趣あり。風毛が句は前後表裏一に見るべき所なし、斯くのごとき句は口をうすば出づるものなり。こゝろみに作りて見せん、何なと題を出されよ。魯町則「露」の句を乞ふ。「露落ちてこぼゆき木陰哉」、又「菊」の題にて「菊咲いて家根のかざりや山島」と、十題十言下に賦したり。若しはらみの句の疑もあらん、一題に十句せんといふ。魯町則「砧」の題を出す。「娘より嫁の音よはき砧哉」、「乗掛の眠をさます礎哉」といふをはじめ、十句筆をおかず。予は蕉門遅吟第一の名ありてすら斯くのごとし、況んや集にも出でたる先師の句なれば、各別の事ありと知らるべし。去來曰、此言自らてらふに似たり、しかれども世間の作者、翁の葬の句、あるは道ばたの木槿などの句體にまよひ、あさましき句を吐き出だし、芭蕉流とおぼえたる族おほし。其輩にしらせんためこれを記すもの也。』

風毛の句が、全くの只事發句であること、芭蕉の句が、其角の「草の戸に我は蓼くふ螢かな」に和した「答の句」であること、何れも去來のいふ通りである。しかし芭蕉の葬の句は「虚栗」にある句で、芭蕉の極く初期の、蕉風開眼以前の句である。その句のよくない事はいくら骨を折つて説明して見ても決して消えるものではない。もし亡師の句を辯護するならば、「答の句」——即ち俳句としては二義的な作品であることを明かにしさへすれば足りるわけである。この句が其角の大酒をいましめる爲めに、飲酒一枚起請を寫して其角に贈つたその手紙の端にあること、俳人傳一一五頁に出てゐるが、『虚栗』には「和三角蓼螢句」と前書があつて、全く二義的な態度で作られた句で、「集にも出たる先師の句」であつても決していふ句ではない。この項から拾ふべき事は、風毛の句のやうな所謂只事發句ならば、立所に口を衝いていくらでも作ることができるといふ點である。でたための俳句に安んじてゐる人、只事發句を後生大事に抱えて

ある人、さういつた人にとつて、この一項はなかく、大切な意味を有つてあらう。

「年立や家中の禮は星月夜 其角
元日や土つかふたる顔もせず 去來

許六曰、當時元日といふ冠、用うまじき難あり。去來曰、元日は嫌ふべき言にあらず、「や」の字平懐にきこゆ、此難なるべし。此句元日といはん外なし、「や」は嘆美したる詞也。許六曰、其角此句を吟じ、春立といへば歳旦にあらず、元日はいひ古びたりと窺ふ。先師曰、さばかりの作者の、今日元日といはんは拙かるべしとて、年立やとは置き給へり。又「や」の字の嘆賞の「や」といふはなし、五ツのやは疑の「や」とは習ひ侍る。去來曰、其角が句においては先師かくのたまふべし、予が句においてはさのたまはし。作者の甲乙をもて云ふにはあらず、己々が志す處に違ひあり。予は珍物、新詞をもて常に第二等に置き侍る。そこは先師も能く見ゆるし給へり。又嘆美の「や」は名目にはなし、名目を以ていはず治定の「や」也。治定にも嘆息、嘆美あり、世話にも「すいたりや虎御前」、「切たりやむさし坊」などいふ皆治定嘆美也と論ず、猶後賢判じ給へ。」

「元日」といふ言葉を用ひてはいけなとか、「いひ古びたり」とかいふのは、言葉そのものが悪いのでなくて、用ひ方如何によるのである。

元日 や 家中の禮は星月夜

句の良否は別として、かうして見ると「元日」といふ言葉がいかに力なく遊んでゐる。芭蕉が「元日といはんは拙かるべし」といつたのも、特にこの句に於いて拙いといつたのであらう。去來が「やの字平懐にきこゆ」といつてゐるのも、この場合「元日」に力が無い爲めに「や」が少しも利いてゐない、その點を臍氣に感じての言であらう。しかし去來の句に於いては全く「この句元日といはん外なし」で、この場合は「元日」といふ言葉がしつかり生きてゐる。かう用ひられた上は、決して「元日」が悪いとはいはれない。次に「や」の用法についての問題であるが、許六が「嘆賞のやといふはなし」といつてゐるのは頗る可笑しい。「五ツのや」とは、どれとどれの五つかはつきりしないけれども、李由と許六共撰の『字陀法師』に「七ツのやの事」として、

- 一、口合のや 是や世の煤に染らぬ古格子
- 二、切や 朝顔や晝は鎖おるす門の垣
- 三、捨や 露とく／＼心見に浮世すゝがばや
- 四、疑や けふよりや書付けさむ笠の露
- 五、中のや(はさみ) 旅をして見しや浮世の煤拂
- 六、はのや(のや共) 白魚や黒き目を明く法の網
- 七、すみのや むざんやな甲の下のきり／＼す

これだけ擧げてゐ、この外に「七ツの外のやもじの事」として、

名所のや 難波津や田螺のふたも冬籠
こしのや 庭掃て出ばや寺にちる柳

は や 秋もはやばらつく雨に月の形
 疑ひ捨るや 一里は皆花もりの子孫かや
 ねがひのや 蓬萊にきかばや伊勢の初便
 願ひ捨るや こもりゐて木の實草の實拾はゞや
 をしはかるや 春なれや名も無き山の朝霞
 と や 星崎の闇を見よとや鳴千鳥
 やすめたるや いかめしき音やあられの檜笠

等を分けてゐる。かうして見ると許六は「や」の字に嘆賞、嘆美、嘆息などの意、即ち詠嘆の意のあることを全然認めてゐなかつたものゝやうである。これは當時の蕉門以外の派に於ける一般の説であつたらしく、『髭山集』や『をだまき』の類には何れも詠嘆の意味の「や」は説いてゐない。しかし支考の『古今抄』には既に「稱美のや」といふのが見え、後の『寂菴』には明瞭に「稱美のや」「嘆息のや」の項目を立てゝゐる。去來が「嘆美のやは名目にはなし、名目を以ていはゞ、治定のや也」といひ、「治定にも嘆息、嘆美あり」といつてゐるのは、やはり詠嘆詞としての「や」を認めてゐたもので、前の「年立つや」の「や」は治定、即ち「年立つ」を強めて提示する意味であるが、「元日や」の方は同じ用ひ方であつても稍詠嘆の氣持を伴つてゐて、去來の見方が正しいのである。なほこの「や」の委しい用法については文法の項を参照せられたい。

其の四 去來抄 (修業教)

『去來曰、俳諧の修行者はおのが好みたる風の先達の句を一寸づに尊み學びて、一句々々に不審をおこし難を構ふべからず。若し解きがたき句あらば、いかさま故あらんと工夫し、或は功者に尋ね明らむべし。我が俳諧の上達するにしたがひ人の句も聞ゆるもの也。始めより一句々々とがめがちなる作者は、吟味のうちに月日かさなりて終ひに功の成りたるを見ず。』

これは連句についての言葉であるが、又俳句の修業上にも適切な注意である。最初から疑ひの眼をもつて見れば、どんな名句でもいゝとは思へないし、味ふ者の力が浅ければ、浅いだけの解釋しかできないわけである。特に古句などを味ふ際に、意味はわかつてゐても味のわからない場合が屢々あるけれども、それを直ちに「つまらぬ」として捨て、またまつてはいけない。こちらの力が、まだその句の味を理解するだけのところまで達してゐないかも知らないし、またどんな誤解をしてゐないとも限らないからである。況して言葉に不明の點があつたり、句意に紛らはしい個所のあるにも拘らず、早卒に價値の判定を斷ずるなどは最も慎まなくてはならないと思ふ。先達の句に對しても亦同じことがいへる。けれども私達は現在の先達よりも、先づ古句を以つて師としなければならぬ。その意味で私は、去來のこの言葉を、特に古句を味ふ上によそへて嚙みしめたいと思ふ。現在の俳句は芭蕉、蕪村の時代より遙かに進んでゐるといふのが、現俳壇の一般の考へであるらしいことは前にも述べたが、それは古俳句を研究しつくした上でなければ何等意味を成さない空論であつて、私達はさういふ自惚れを持つ前に先づできるだけ多くの古句を味つて見なければならぬと

思ふ。でなければ、眞に功を成すことは困難だと思ふ。

『去來曰、先師は門人に教へ給ふに、其ことば極りなし。予に示し給ふには、句毎々にさのみ念を入るゝ物にあらず、又句は手づよく俳意たしかに作すべしと也。凡兆にはわづかに十七字なり、一字もおろそかに置くべからず。誹諧もさすがに和歌の一體なり、句にしをりの有るやうに作るべしとなり。是は作者の氣性と口質によりてなり。あしく心得る輩は迷ふべきすぢなり。同門の中にもこゝに迷をとる人多し。』

芭蕉が多くの門人を導くのに、その各々の長所短所を洞察して、よくその短所を補ひ長所を伸ばした事は到るところに察せられるが、この項などはその最も顯著の例である。去來は上來しば、述べたやうに、生真面目過ぎる作者で、その出来不出来はとにかく、一句々々推敲に推敲を重ねるといふやうな人であつた。そして、寫生風な克明な句よりも情趣を重ねてぼんやりした句を多くつくり勝ちであつた。さうした去來に對して、「句毎々にさのみ念を入るゝ物にあらず」といひ、「句は手づよく俳意たしかに作すべし」と訓へてゐる。又一句々々動きのとれないやうな緊密な寫生句に、その行き道を求めてゐた凡兆に對しては、「誹諧もさすがに和歌の一體なり、句にしをり有るやうに作るべし」と、その短所を突いてゐる。この外酒堂に對しては「發句は汝がごとく物二三ツとりあつめて作るものにあらず、こがねを打ちのべたるやうにありたし」といひ、許六に對しては「發句は物ととり合するを上手といひ、あしきを下手といふなり」といつてゐる。一見矛盾のやうであるけれども、それ／＼に「作者の氣性と口質(句の詠みぶり)によつて、訓へ導いてゐるのである。

『許六曰、發句は題の曲輪を飛出て作るべし、廓のうちにはなきもの也。自然曲輪の中に有るは天然にして稀也。

去來曰、發句は曲輪の内になきものにあらず、殊に即興、感偶する物は多くは内にあり。然れども常に案するに、内はすくなく多くは古人の糟粕なり。千里にかけ出て吟する時は、句おほきのみならず第一等類をのがる。初學の尤も思ふべき處也。功なるに及びては又内外の論にはあらず。』

「題の曲輪」とは季語そのものゝことで、他に配合を求めず、季語そのものゝ内に句を求めようとしては俳句はできない、できても極めて稀れであるといふのが許六の主張である。これに對して去來は、季語そのものゝうちにも俳句が無いのではない、即興、偶感の句の多くは題そのものを詠むのである。しかし普通に季語に即してつくと陳腐になるすつとかけ離れて配合物を求めれば、配圍が廣くなるばかりでなく第一に等類を逃がれることができるというてゐる。これは例へば、鶯なら鶯そのものを中心に一句を纏めようとする、なか／＼困難であり陳腐になり易く、しかも類句の憂がある。しかし鶯以外のものに配合を求めて、所謂取合せものによつて句をつくれれば、無盡藏にいくらでも得られるし、陳腐に墮ちず類句も比較的少くなるといふ意味である。しかしこれも人おの／＼の性質があつて、前に支考の「馬の耳すばめて寒し梨の花」の句の項で述べたやうに、取合せた句に得手な人もあれば又一句すら／＼と云ひ下した句の得意な人もある。必ずしも一概にはいはれないけれども、總じて配合物を求めて句を作ることは樂のやうである。許六が「たとへば題を箱に入れ置き、其箱の蓋に上つて乾坤を廣く尋ねる物也」といつたのもこの間の消息を傳へてゐる。

『去來曰、句案に二品あり。趣向より入ると、又詞ことば、道具より入るとなり。詞、道具より入る人は多くは頓作多句也。趣向より入る人は遅吟寡句也。されど案じかたの位を論ずる時は趣向より入るをよしとす。詞、道具より入る事は和歌者流には嫌ふと見えたり、誹諧にはあながちにきはらず。』

「趣向より入る」といふのは、先づ情趣、風景を探つてそこから一句を得ようとするのであり「詞、道具より入る」とは、變つた言葉とか、面白さうな材料を拾つて、そこから一句を作り上げようとするのである。一は内から句を得るのであり、一は外から句を作るのである。この二つは恰度前項の曲輪の内外の關係によく似てゐる。そして前者が頓作多句であり、後者が遅吟寡句であるのは、曲輪の説に關係づけて考へれば自ら明かであらう。去來が趣向から入る方をよしとしてゐるのは、あながち去來の得意な道だといふばかりでなく、實際その方がすらくとした、所謂「黄金を打ちのべた」やうな上品な句になり易いのである。芭蕉は「發句は頭よりすらく」といひくだし來るを上品とすといつてゐるが、さうした句は配合によつて句をつくり、又詞や道具から這入つて案じたものではできない。しかしそれも決して絶對的のものではなく、作者によつてはその反對の場合もあつて、要するに出來上つた句そのものが良くありさへすればよいのであるから、必ずしもかうした言葉に拘泥せず、各自得意な點に進めばよいわけである。

『去來曰、句に句勢といふ事あり。文に文勢、語に語勢あるがごとし。たとへば「ふるふがごとく小糠雪降る」と云ふ句を、先師曰「打あぐるごとく小ぬかゆき降る」と作れば句勢ありとなり。』

「ふるふがごとく」といへば、雪の降る形容として、灰でも篩ふやうな粉雪の感じは出て來るがそれだけに勢ひがならず。「打あぐるごとく」といへば、砂でもぶちまけた場合のやうな感じで、粉雪の姿は出ないにしても活氣が出て來る。「馬鹿」といはれるより「薄馬鹿」といはれる方が痛いし、「ざん／＼降る」といふよりも「土砂降り」といふ方が強いい。これ等は皆所謂「語勢」であるが、かういふところにしつかり思ひを潜めて、日常の用語はいふに及ばず、讀書の際などによく注意して國語の性質を呑み込んで置くべきである。國語によつて表現される俳句であるから、國語の性質をよく理解して、自由に驅馳するのではなくては到底いゝ句はつくれない。

『去來曰、句に語路といふものあり、句はしりの事也。語路は盤上を玉のはしるがごとく、滯なきをよしとす。又青柳の風に亂るゝがごとく、優を取りたるもおもしろからん。溝川に土泥のながるゝやうに行きあたり／＼なづみたるはわろし。』

「語路」といふのは言葉のつき具合である。頭からすらく／＼と言ひ下して、少しも滯ることなく、「盤上を玉のはしるがごとく」又、「黄金を打のべたるがごとく」おのづから流露する底の調子がいゝのである。しかし内容の弱々しい優美な句は、その調子も亦「青柳の風に亂るゝがごとく」たをやかでなければならぬ。ゴツ／＼と物にぶつかり／＼行くやうな調子はよろしくない。一時新傾向句の起つた前後には、漢語などを無闇にとり入れた、拮据な調子が流行したが、それ等よりもより一時の流行であつて、既に現在ではどの流派にも跡を絶つてしまつた。私は先日帝國ホテルに句佛上人を訪ねて、小一時間閑談した折に、能樂と俳句が話題の中心であつたので

能談と句話とあかるき春の雨

と作つて見たが勿論意に満たなかつた、その上ふと碧梧桐氏が故大須賀均軒先生（乙字先生の嚴君、漢詩人で南畫家である）に遇はれた時の句、

詩話畫論しぐるゝいとまなかりけり

といふ句を想ひ出し、はたと時分の愚劣さを覺つたが、この二句を較べたら、凡そ調子のいかに大切であるかゞはつきりしようと思ふ。なほこの事は何れ「俳句音調論」の項で詳述するつもりである。

『杜年曰、發句の善悪はいかに。去來曰、發句は人のもつともと感ずるがよし、さも有るべしと云ふは其次也。さも有るべきにやといふは又其次也。さはあらじといふは下也。』

句の佳い悪いの區別を示した言葉であるが、これはさう簡單に決定してしまふわけにはいかない。勿論見る方の人が相當力量の勝れた人であり、又經驗も學識もある人なら、この通りで差支へないが、智識の不足の爲めに、經驗の乏しい爲めに、又感受性の稀薄な爲めに、佳句であるからといつて必ずしも「もつとも」とは感じられない場合がある。相當力量のある人にとつては「もつとも」と感じられる句が、少し力の劣つた人には「さも有るべし」とも考へられ、「さも有るべきや」と疑ひもし、又稀れな獨斷家にとつては「さはあらじ」と疑はなくてはゐられない場合もある。要するに見る人の力にあるのである。陶器や彫刻のどんな名品であつても、わんぱく子僧に遇つては一たまりもなくこはされてしまはうし、どんな名畫名筆であつても、味解する能力の欠けた田夫野人の前には、一片の紙屑に等しい。

い。しかし大體に於いて觀者がもし、純な、神に近い氣持ちになることができれば、そしてほんとうにすぐれた作品であるならば、必ず理窟なしに頭が下がる筈である。頭の下がり具合に多少の不自然さを感じるならば、所謂「其次」の作品である。世間には愚にもつかない作品（あなたがち俳句のみとはいはない）に、無闇に易つぽく頭を下げてゐる人もあるやうだが、それはこの場合とは逆に、不純な態度でものを見るから、その價值批判が全く轉倒してしまつてゐるのである。

『杜年曰、發句と附句の境はいかに。去來曰、七情萬景こゝる留まる處に發句あり、附句は常なり。たとへば鶯の梅にとまつて啼くといふは發句にならず、鶯の身を逆に啼くといふは發句也。杜年曰、心に留まる所は皆發句なるべきか。去來曰、此うち發句になると成らぬとあり、たとへば、

つき出すや種のみきかへる 好春

此の句を先師の古池の蛙と同じやうにおもへるとなん、事めづらしく等類なし。さぞ心にもとまり興もあらむされど發句にはなしがたし。』

「七情」とは七つの情で、喜・怒・哀・懼・愛・惡・欲である。私は前に、自然の事物が我等の情趣の象徴となる時のみ、はじめて自然は人間にとつて絶大の意味をもつてくると述べたが、「七情萬景こゝるに留まる」とはやはり同じ意味である。即ちさうした感情人間も亦自然のうちである）や風景が、特に深い感動を與へる時、そこに俳句が發生するのである。鶯が梅にとまつて啼いたといふのは、たと尋常の事實を事實のままに尋常に描寫しただけで、まだそこには

作者の感動が盛られてゐない。それ故それだけでは俳句にならないが、鶯の身を逆さかしに啼く（鶯の身をさかしまに初音かな 其角）といへば、鶯の特異な動作——即ち鶯の本情を掴んでゐるので、それが直ちに作者の感動の象徴となり、従つて「發句」となり得るのである。樋の口につまつた墓を突き出すといつても、それは極めて單純な「事實」に過ぎないので、いくら興があり、心にとゞまつても、つひに俳句にはなり得ない。芭蕉の古池の句と較べて、それ／＼の持つてゐる情趣を味ひわけたら、この間の消息はおのづから理解されようと思ふ。

●野明曰、句のさびはいかなる物にや。去來曰、さびは句の色也。閑寂なる句をいふにあらず。たとへば老人の甲冑こゑを帶し、戰場に働き、錦繡をかざり御宴に侍りても、老の姿有るがごとし。賑かなる句にも、靜かなる句にも有るものなり。たとへば

花守や白きかしらをつきあはせ

先師曰、さび色よくあらはれたり。』

「さび」といふのはものゝ統一から来る一種の落つきである。品位である。どんなきらびやかないでたちをしてゐてもそこに老人として一種の落つきと品位とを失はないところに、老武人の眞趣がある。華やかなものは華やかに、濼いものは濼味のなりと、賑かなものゝ賑かなまゝに、靜かなものは靜かなまゝに、それ／＼品位と落つきとを持つ、それが所謂「さび」なのである。但し芭蕉が「花守の句」（句意については「俳句評釋」参照）について「さび色よくあらはれたり」といつたのはやはりその清閑な情景をたゞへたものであらう。この句には特に上述した意味では何等

特殊な境地が出てゐないから。

『野明曰、句の位とはいかなるものにや。去來曰、これも又一句をあぐ、

卯の花のたえ間たゝかむ闇の門

先師曰、句の位尋常ならずとなり。去來曰、畢竟句位は格の高きにあり。句中に理窟をいひ、或は物をたくらべ或はあたり合ひたる發句は位くだるもの也。』

「卯の花」の句は、闇の中に眞白に咲きつゞけた卯の花垣の、一寸とぎれてゐるところが門で、そこを叩かうと與じた句である。これに對して「句の位尋常ならず」といつたのは、そのいかにも上品な境地を指したのであらう。去來のいふやうに、一句の中に理窟をこね、物と物とを比較したり、ゴタ／＼と詰め込めるだけ詰め込んだやうな句は、どうしても下品になる。「頭よりすらく」と云ひ下したるを上品とす。格調の高い、所謂句位句品の備つた句は、さうした行き方が得易いであらう。

『野明曰、句のしをり、細みとはいかなるものにや。去來曰、しをりは哀れなる句にあらず、細みはたよりなき句にあらず。しをりは句の姿にあり、細みは句のこゝろにあり。是も證句をあげていはゞ

十圓子も小粒になりぬ秋の風

先師曰、此句しをりあり。

俳句作法

鳥ども、寝入つてゐるか 餘吾の海

先師曰、此の句細みありと評し給ひしと也。』

「しをり」は芭蕉の用例を綜合して考へると、どうしても「枝折」或は「葉」の意であつて、一句に曲節があり、作意たしかな點を指すので、「句の姿にあり」といふのもそれである。しかし特に「哀れなる句にあらす」と斷つてゐるところを見ると、或は當時「萎る」意に誤られてゐたのかも知れない。能樂の方では今でも手を顔へ當て、泣く形をするのを「しをる」といつてゐる。「十圍子」の句は『乙字俳論集』に

「十」といひ「小」とあしらひ、「も」から「なりぬ」に斡旋して曲節が自然について居る、これを葉があるといふのである。

といつてゐるやうに、語句がよく整頓されて、些のゆるぎもない。もし「萎る」意とすれば、この評語などは殆ど解釋のつかないことにならう。

「細み」について「たよりなき句にあらす」と斷つてゐるのは、細みが、繊細な句をいふのではないとの意であり、「句のこゝろにあり」といふのは、一句の精神が微妙であつて、所謂詩思微塵に入る程の句をいふとの意である。やはり『乙字俳論集』に路通の「鳥共も」の句を擧げて、

三界に家なき乞食生涯の路通が、琵琶湖畔（餘吾の湖の誤り）を夜更けて通つた時の吟で、寒さと飢とに凍えながら、水鳥さへもうらやましく思つた作者の境涯は言外に力強く現はれて居る。あらはにそれと我が境涯を言はずして、しかも力強くその境涯があらはれて居る此句が、細みといふ評を受けた唯一の例であるところから推量

するに、あらはに言はずして句意まぎれなきものを指していふのであらうと思ふ。

とあるが、大體我等の感情の頂點に達した句は、細みがあつてしかも作者の境涯は力強くあらはれてゐる。感情の尖端を巧みに捉へてゐるからである。「鳥共も」の句にしても、「寝入つてゐるか」と軽く疑つたところに、路通の抱懐してゐる美望感がするどく閃めいてゐるので、句の表からは極めて隱微の情ではあるが、そのかけに千斤の情趣が藏されてゐるので、「細みは句のこゝろにあり」とはその點を指すのである。

其の五 獨言

『俳諧の道はあさきに似て深く、やすき似てつたはりがたし。初心の時は浅きよりふかきに入り、至りて後は深きよりあさきに出づとか聞きし。むかしは人の心すなほにして初中後を経しかど、今はその修行する人だにすくなく、心皆さきにはしりて、いつしか人もゆるさぬ上手にはなりけらし。これをおもふに、俳諧は只當座の化口に於て、根もなきいひ捨草なりとかろき事におもへるなるべし。是もまた和歌一體とか聞く時は、かりにも浅々敷くおもふべき道にはあらぬを、ほいなき事にぞ侍る。』

俳諧の道（發句も連句も含むが）は一見淺くて、いかにも容易のやうであるけれども、その實なかく傳へ難いものだ。初め淺いところから心掛けて、追々に深い所へ達し、更にその深いところから最初の淺い處へ出る、これが俳諧修業の要諦だといふのである。寺田氏の「俳句の哲學的意味」の項に於いて、單純から複雑化へ、複雑化から更に單純化への道を通つて來た讀者にとつては、この點容易に首肯できようと思ふが、達し得た作品が淺く見えたも、それは初

學の人の淺さとは全くちがふ。所謂格に入つて格を出た作品と、格に入る前の作品との相違と同じである。複雑化の受難を迴避する人生が無意立であると同様に、一度格に入り、深きに達した上で得た自由と淺さでなくては所詮無意義なのである。古人は初中後と、順々に階段を踏んで眞面目に修業したが、今はさうして苦しい修業をする人が少なく、勉強もしないでゐて、「いつしか人も許さぬ上手に」なつてしまふと鬼貫はいつてゐる。ひとり鬼貫の時代ばかりではない。口から出まかせの句を詠んでひとり天狗になつてゐる人は現在決して少くはないやうである。

『ことやうの句を作りて、それを新しとおもふ人は、此の道を深く尋ね見れば、遠きさかひに入りがたくや侍らん。詞も古きを用ひ、心は新しきを用ゆとこそ聞きし。』

變つた句さへつくれば何でも新らしいと思つてゐるやうな人は、この道を深く探つて見ないから、到底深遠な境地に入ることは困難であらう。いひ古された尋常の言葉をもつて、新らしい心をあらはすのが眞のあたらしさだ、といふのがこの文の大意であるが、つとめていへば眞の新しさは用語や句法にあるのではなく、一句の精神そのものにあるといふのである。

『ある人、扱も俳諧はならぬ物にて候といひけるほどに、其のならぬ物と知りたまふはひとかどの事にて侍る。予は天性數奇^{すき}て此の道にこゝろを盡す事およそ四十年にあまりて、行くにも座するにも忘るゝ事なく、臥時はまくらのほとりに硯を置きて寢ざめだに外なければ、道のなりがたしといふ所を聊かわきまふに似たり、平生深く心も

いれざる人の、ならぬ物としり顔にいひたまふこそきこえぬ。』

最後の一句は甚だ辛辣な皮肉だが、とにかく「俳句はむつかしい」と覺つた時、ほんとうに力がついたのである。しかし鬼貫が四十年餘りも熱心にこの道に携はりながら、しかもなほ「道の成り難しといふ所を聊かわきまへたといつてゐるやうに、その「むつかしさ」にもいろ／＼程度がある。一年やつて見て感じた「むつかしさ」と十年二十年修業して感じた「むつかしさ」とは、その内容に格段の相違がある。そしてこの「むつかしさ」は終生「易しさ」に置きかへられることは不可能で、萬一置きかへられる時が來たとすれば、最早俳句はその時限りである。こゝに「道」の永遠さがある。人生のはてしなさがある。この「むつかしさ」を一つ切り抜ければ、切り抜けると同時に次の「むつかしさ」が待つてゐる。かくして遂にとゞまる折は永久にない。それ故句作の進歩とか上達とかいふことも、見方によつてはこの「むつかしさ」をより深刻に感ずるところにあるといへる。一度や二度「むつかしさ」を痛感したからといつて、直ちに俳句を放棄するやうなことでは、到底俳句のわかる筈がない。

『俳諧をする人、あらましにもいひこなせばはや得たり顔に止まるあり、無下にほいなくぞ侍る。或る時は句もなりやすきやうにおぼえ、又或る時はひたすらなりがたくもなり侍らん事、幾かはりも有りぬべし。深く入りなん人は、其程／＼に功つもりて猶むつかしき事を覺え侍らん。修業の道に限りあらざれば、至りて止まる奥もあらじ、只臨終の夕べまでの修業と知るべし。』

少しできるやうになると、すぐ高慢病にかゝるのは、昔も今も變りないが、まことに「無下にほいな」き次第であ

る。「幾かはりもありぬべし」といふのは、近ごろの言葉でいへば「行き詰まる」ことである。或る時は容易にひよいひよいと句が生れ、或る時は出漕つて一向句ができない、さうしたできない時期をいきつまつたといつてゐるが、これは全く一時的の現象であつて、決して永久に行き詰つてしまふのではない。そしてこの行き詰りは個人々々にもあり又團體的にもあり、更に俳壇全體を襲ふこともある。

個人的に行き詰るのは、多く週期的にやつて来て、最初の間夢中に作つてゐるやうな場合は心配ないが、「むつかしさ」を悟り、自作の上に反省と思索とが要求されるやうになると、つくつてもつくつても意に満たないものばかりになつてしまふ。そこではじめて眞に俳句の「むつかしさ」を覚え、ばつたり句ができなくなる。時には自作ばかりでなく、他人の句を見ても一向つまらないものに見えて、俳句全體が面白くないものになる。こゝに第一の危険が孕んでゐて、かなり熱心な人でもこゝでへこたれてしまふことが多い。一度行きつまると、さ程熱心でない人はすぐ飽きが来るし、又熱心な人は熱心であるだけに焦り方が激しい爲めに疲れてしまふのである。この場合に處する道は只一つ、暫らく俳句を忘れる事である。そして心を讀書に傾けることである。冷やかな理論は、いつでも我々の熱した頭を落つかせてくれる。そこからやがて第二の俳句の道が新らしく展けるであらう。

『作意をいひ立てたる句は心なき人の耳にもおもしろしとやおぼえ侍らん。又おもしろきは句のやまひなりとぞ修し得たる人の幽玄の句は、修行なき人の耳にはおぼろげにもかよふ事かたかるべし。しかもその詞やすければいはゞ誰もいふべき所なりとやおもひ侍らん。』

ほんとうに佳い句は、どこといつて取立てゝいふべきところはなく、しかも一句全體がどことなく面白いのである。『乙字俳論集』にも「こゝまでは誰もいふべし、この一語誰かよくせんなどいふは上乘の句に非ず。よき句はどこ指して目立つところなくして感情あふれ、其の味淡くして不盡の趣あり。而も事に觸れて身にしむこと雖もてもまるゝが如く、再び檢すれば鋭き語氣さへもなし、これ境涯の到れるなり。」とある。況して作意を立て、おもしろ可笑しく山をつくるのなどは、「句のやまひ」に過ぎない。又前にも述べたやうに、一見淺く見えても、修業を経た句はその奥に幽玄微妙な趣を含んでゐて、一見平々凡々の如くでありながら、しかも味ひつくすことのできない滋味を持つてゐる。だからその外見が易しいからといつて、誰でもたやすくいへると思つてはいけないのである。

『聞えぬといふ句に幽玄と不首尾の差別侍り、まことを辨へぬ人のさまぐに句を作りて、是にても未だ聞え過ぎておもしろからじと、ひたぬきに詞をぬきて、後には何の事とも聞えぬ句になり侍れど、作意は初一念の趣向をこゝろに忘れ侍らねば、我のみ獨り聞ゆるにまかせて、いひひろむるもかた腹いたし。又幽玄の句はつたなき心をもて、其の意味のおもしろきところを聞き得ぬなるべし。』

聞えぬ——つまりわからぬといふ句にも、境地が深くてわからぬ句と、表現が不完全の爲めにわからぬ句と二いろある。前に推敲の項でも述べたやうに、表現の不完全な句であつても、その作者自身にとつては、なほ最初の趣向が背景となつて頭に残つてゐる爲めに自らだけにはわかる。しかし背景となるべき趣向を全然知らない讀者にとつては恰度謎をかけられたやうなもので、表はされた言葉が全然意味をなさない。それを得意になつて説明して歩くなどは

（まことに片腹痛い次第といはねばならぬ。）

『我句をおもしろく作り侍らんより、きくははるかにいたりたしと、古人の詞にも見え侍り、ひたすら修業し侍らん道なるべし。』

創作よりも鑑賞のむつかしさを述べた言葉である。これにつけて私は、近ごろ特に一般の俳人が發表慾に驅られて、眞に俳句を楽しむ傾の少くなりつゝあるのを、時勢の然らしむるところとはいへ、まことに慨嘆しないではゐられない。他人の句を味はひ得る力がなくて、どうして自ら立派な句が作り得られよう。

『古風もむかしは當風ならし。今はた當風とおぼしき句も、又いつしか古風となり侍らん。古風といふも當風といふも、ともに作り求めたる句のすがたによりて新古の名はあれど、修し得てまことの道を行きけん人の句は、幾とせ経るとも新古の差別はあらじ。只この道に深く心を入れなん人のまれなるこそなげかはしけれ。』

不易と流行の論である。もの、の皮想に囚はれた句は、たゞその當時にあつては新らしいけれども、やがて時と共に古くなつてしまふ。それに反してほんとうに「まこと」に觸れた句は永久に新らしい。元祿の佳句が、今日いよゝ光を放つてゐるのはその爲めで、ほんとうにいゝ句は決して「古句」といふ條件は一つも持つてゐない。

『透逸の發句といへるは、打ちこゆる所何とらへておもしろき事も見えす、只調すなほにたけ高くして、其意味口

をして述ぶる事かたきをこそいひ侍れ。』

これは前に引いた『乙字俳論集』の言葉に符合するが、鬼貫は更に、「是は常に詞を巧みよせたる句をのみ面白き事に覺えて、もてあそぶ人の耳には聊かかよふべからず。世におも周ねく人のゆるしたる作者の秀逸と、名にたてる發句を聞きて、その底の聞えざる輩は、我心にうたがひをおこして、修し入りて見侍らば、自然とおもしろき意味をもしる事あらん。その分上に至らば、自句に秀逸をもまうけぬべし。小細工にのみ心止まりて、我とほめしてん作者は、終に人の句の秀逸を聞き得て、たのしむべきさかひにもいらす、もとより一句のぬしとなりなん事かたくや侍らん。」といつてゐる。

『鶯はうぐひす、蛙はかはづと聞ゆるこそ、おのれ／＼が歌なるべけれ。うぐひすに蛙の聲なく、かはづにうぐひすの轉りなきこそまことには侍れ。』

もの、の本性——即ち「まこと」を捉へなくてはいけないといふのである。

『俳諧の修行もなくて、心のみ高く止りたる作者は、たとへばたかどのゝ上にのぼりて四方山をながめつくしたる人の、心ゆう／＼と打晴れたりといへるを聞きて、我もともに風景を見んとて、居ながら其所に至らん事をこのめるがごとし。ひとつ／＼階あさはしをのぼらずして、いかでか高き所に至るべき。此理ことばりをよくわきまへ侍りて、未練の人はひたすら修行すべき事にぞ侍る。』

一段のぼつた人には一段だけの世界しかわからないし、二段のぼつた人には二段の世界しかわからない。諺でも淨瑠璃でも、乃至碁や將棋でも、自分より僅かに上か、或はひよつとすると自分と同じ程度ではないかと思はれるやうな人は、必ず自分より遙かに上である場合が多い。これは自分より僅かに上であつても、すつと上であつても、こちらの實力の及ばない悲しさは、その間に何等の區別がないからである。つまり二段までのぼつて、一段と二段との世界しか知らない身にとつては、三段の世界も十段の世界も殆ど差別がつかないからである。それに反して自分より下の人は凡そどの程度に立つてゐるか一目でわかる。このことは劍道などになぞらへて考へて見たらはずきり合點が行くと思ふが、實際「力」といふものは恐いものだ。

『未熟にしてわれこそ熟したれとおもへる人はおろかに侍る。修し得たる覺もなく、上手になるべき道理はあらじと、我とわが心をさがしてあやまりをしるべし。修行なき人の器用一ぺんにて及ぶべき事にもあらず。又智恵才覺をもて至るべき道にもあらじ。』

元祿の作家が金玉の句を残してゐるのは、かくして異常な修業をした爲めであらう。二年三年の修業で忽ち先生となり、或は何の反省もなく出放題の句を並べて三十年四十年と、徒らに日を過したやうな人がひとり大家然として我もゆるし人も許してゐる現在では、到底後世に残るやうな句は得られないであらう。鬼貫は更に「我は俳諧を仕習ひてよりいくとせを重ねたりと、指をりかぞへてそれのみ修行なりとおもへる人は心得違ひも侍らん。まことの道にこゝろをよせずして、句のうへをのみいひもてあそびたる作者は、たとひいくとせをふるとも身の益とはならずや侍らん」ともいつてゐる。

『俳諧の修行といへるは、ひたすら句にまことの味はひを稽古して、平生人に交はるをもすぐにそのまことを用ひて、いつはりなき事をむねと心得たらんをこそいふべけれ。』

俳句の窮極はやはり人格にある。一心に修業して、その修業によつて人格を磨き上げ、磨き上げられた人格からほんとうに名句が生れるのである。小手先の器用で巧みな句をつくるだけであつたら、それは俳句製造家であつて眞の俳人ではない。

『つよき句、よはき句の事、大かたの人は俳言がちにいひて、句のかたちいかめしく作り、或は文字を聲にていふたぐひをのみつよき句なりと覺え侍る。心得ちがひなるべきか。たとへばがさつなる人の喧嘩しける時、其のさまさながら勇士に似たれど、底意に死すべきまこともなく、只人の恐るべき様を作りたれば、死ぬべき場におよびて逃ぐる事すみやかなるがごとし。又まことを深くおもひ入りて、すがた、詞、柔和に仕立てたるをよはき句なりといへるも又心得違ひなるべしや。たとへば物とがめしける人に行きあひて、我にあやまりなき事にも詞をつくしてやはらかにいひける時は、よはかりしやうに見え侍れど、やむ事を得ざるになりては、一足もさらずして死をきはむるがごとし。まことすくなかりしをよはき句といひ、まことを深くおもひ入りなんをつよき句なりといふなるべしや。その虚實をも辨へずして、句のすがた、詞にのみかゝはりて、強弱の沙汰しけん人は、未熟

にしてひとへにあやまりなん事にや侍らん。』

鬼貫は又「詞すなほに仕立てたらん句を専一なりと、一概におもふべからず」ともいつてゐる。句のよしあしは表現の如何によるのではなくて、「まこと」に觸れてゐるか否かによる。従つて句の強弱といふ事もその「まこと」に對する觸れ方の如何によるのである。

『まことを深くおもひ入りて言ひのべたるも、詞よろしからざるはほいなくぞ侍る。心と詞とよく應じたらん句をこそこのむ所には侍らめ。』

表現の如何によつて句の善悪が分れるものではないけれども、いくら「まこと」に觸れ、いゝ内容を擱んでも、表現がそれに應じなくては面白くない。つまり内容と表現とがびつたり一致しなくてはまた上乘の句とはいへないのである。

『すべてむつかしき句を案じ入りたる時、よき趣向のうかみたるは、日でりに雨得たらんこゝちして、やがて句に作り侍る事大かたの人の常にて侍る。其の時今一かへし返して、心のうちに吟味有るべき事にこそ。』

何とかして一句を得ようと焦つてゐる際に、ふとよい考へが浮ぶと、それがいかにもすぐれた趣向のやうな氣がして、直ちに一句に纏めるといふやうな事は實際誰にもありがちな事である。しかしそれがそもゝ失敗のもとなのである。鬼貫はその失敗の例として、次のやうに述べてゐる。

元祿十年の春、きさらぎのはじめ、或人のもとへ行けるに、床に貫之の像をかけ、發句所望せられし時、折ふし空かき曇りてこそめ降りける中に、籠の梅のしろく咲きて、そこらおぼつかなき程に見え侍りければ、

雨雲の梅を星とも晝ながら

といふ句をつかうまつりぬ。かれこれ案じめぐらしける中に、ふと蟻通の諷をおもひ出して、よき趣向とらへたりとて取あへず仕立てたる句にて侍り。惑説をも辨へずしてうかと心得たれば、かくあやまりたる句をも仕出し侍りぬ。

「蟻通の諷」とあるのは謡曲蟻通ありとほしのことで、この謡は貫之が雨の夜道の暗さに、蟻通明神の社前と氣付かず、馬を乗り入れて神の怒に觸れたが、「雨雲の立ち重なる夜半なればありとほしとも思ふべきかは」といふ歌を詠んで神靈を和らげたことをつつたものである。この「ありとほし」は蟻通と「有りと・星」とを引かけたのであるが、鬼貫はそれをカンちがひしてこんな句にしたのである。昔は故事を用ひることがやかましく、自然かういふ事が重大な失敗と目された。しかし私たちはこれとはちがつた意味で折々失敗する。それは「早に雨を得たらん心地」で、ばかにいゝ趣向だなどゝ有頂天になつてゐると、類句があつたり、或は唐突に過ぎて他人に通じなかつたりする。とにかくさういふときにはもう一度最初から冷靜に考へなほして見ねばならぬのである。

其の六 三冊子

「發句の味は行きて歸る心の味也。たとへば 山里は萬歳おそし梅の花 といふ類なり。山里は萬歳おそしといひ

はなして、むめは咲けるといふ心のごとくに行きて歸るの心、發句也。山里は萬歳遅しといふ斗のひとつへは平句の位なり。』

「行きて歸る」といふのは、一句讀過した餘韻が、更に句の頭に歸つて來て順還する意である。これは俳句が具足圓滿、一句を以つて完全に獨立する故であるが、この點については井泉水氏が、

(前略) 俳句は凡て

しづかさや——岩に——しみいる——蟬の聲

といふ風な氣持に、ゆつくりと讀みながら味ふべきものである。斯様に、語と語との間に、陰影が出来る所は、

近代の長詩の行分けと同じ呼吸である。で、之を長詩的に書けば、

しづかさや

岩に

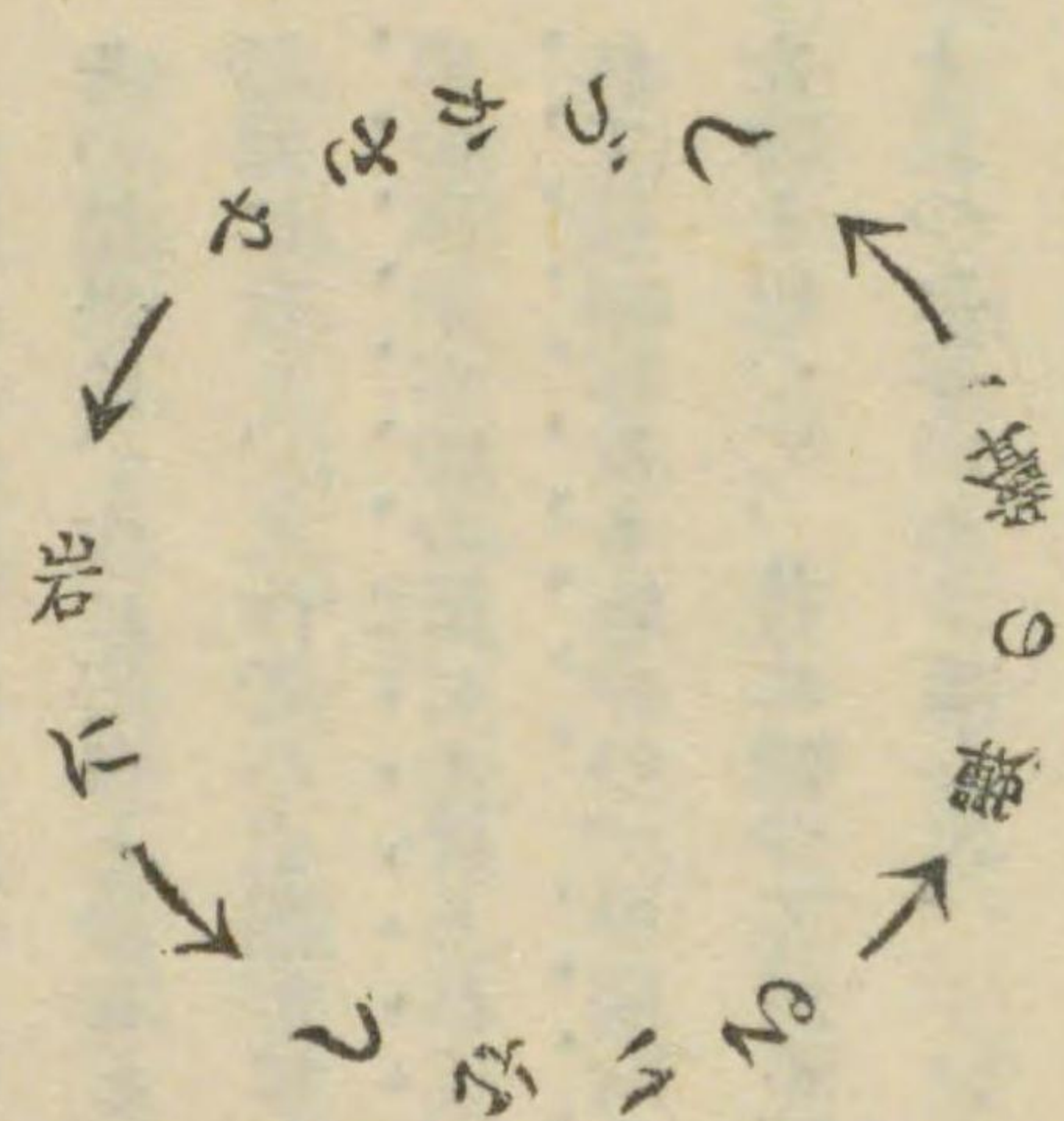
しみいる

蟬の聲

と四行になるべきリズムである。それならばかう書改めたらばどうかといふに、四行に書くと、一行づゝ語句の感じが次へ次へ移つて「蟬の聲」でとまつてしまふ。所が、俳句では、此「蟬の聲」が再び、初めの「しづかさや」へ撥ねかへつて來る、而して此の「しづかさや」で凡てをくくるのである。(中略)で、シエマチツクに書いてみれば、

斯ういふ風になる。(下略)『奥細道評論』一二八頁)

かういつてゐるのはいかにもはつきりしてゐると思ふ。山里の句についても全く同じである。「行きて歸る」——昔の人は簡単な言葉で實によく思ふところを傳へてゐる。



『師のいはく、俳諧は教へてならざる所あり、よく通るにあり。或人のはいかいは曾て通ぜず、たゞ物をかぞへて覺ゆるやうにして通る物なしと也。』

所謂自得發明である。型だけは教へても教へられるし、又數へるやうにして覺ゆることもできるけれども、それ以上の、以心傳心的な形のない精神に至つては、つひに教へることも習ふこともできない。これはひとり俳句のみならず、すべての文藝がさうであらう。

『師の曰、句は天下の人になへる事はやすし、一人二人にかなゆる事かたし。人のためになす事に侍らばよしなからんと、たはれの詞なり。』

俗衆の喝采を博することは易しいが、眞の具眼者を動かすことはむづかしいといふのである。そして俳句は人の爲めに作るのだつたらまことにつまらないといつてゐる。俳句をつくる目的が活字の上にあるかのやうに誤信してゐる今の多くの人の三省すべき言葉であらう。

『師のいはく、絶景にむかふ時は、うばはれて不_レ叶、物を見て取所を心に留めて不_レ消、書寫して靜かに句すべしうばはれぬ心得もある事也。そのおもふ所しきりにして、猶かなはざる時は書うつす也、あぐむべからずと也。師、松島にて句なし、大切の事也。』

「うばはれて不_レ叶」とは、絶景に魂を奪はれて、ぼんやり見過してはいけないといふ意で、景の急所々々をしつかり記憶して置き、あとで靜かに句をつくるべきだといふのである。五十嵐力博士の旅行記を集めた『遠近』といふ書の序文の中に、

私は曾て、英のデ、タインシイが書いたものの中に、新しく得た印象を書き記すには、早過ぎても遅過ぎても面白くない。見聞くあとから、すぐ書かうとすると、雑多な印象が、目まぐるしく飛び出して來て筆寫を迫るので、その結果は、作に選擇と餘意と落つきと縮りとが乏しくなる。また時期を過して書くと、印象が不正確になり、稀薄になり、又作者の主観がほししまゝに飛び出す結果、自然に拵へ事の差出口が多くなる。恰好の時機は、小事の印象が時の節（ま）にかけられて、重要な印象のみが著しく残つた時、而して残つた重要な印象が時にぼかされて稀薄にならぬ中、中間期にある。言ひ換へると、新らしきにつけ込んで競ひ立つた印象が、鳴りをひそめた時を狙つて、後に残つて居る著明な印象を親切に精密に寫すにある。といふやうな事を云つたのを見て、成程と思つた事がありました。

とある。いかにも敘景の要點をくまなくいひあらはした言葉であるが、芭蕉の「心に留めて不_レ消、書寫して靜かに句すべし」といふのも、全く同じ意味で、面と向つた景色といふものは、それが絶景であればあるほど掴みどころがなく、句にも文章にもなり難いが、しばらく時を経るにしたがつて樂にできるやうになる。このこつは旅行などした場合特に大切である。序に『乙字俳論集』の旅行吟についての一項を引用して置かう。

俳句は旅行吟を以つて第一とすることいふまでもない。旅行も一大用事をかゝへては句作に便宜がない。又其身に病苦などあつても思はしくない。心怡々悦々として行く手の世界めづらしく、小兒のやうにはしやぎたいのを押し靜めながら、他人と話などは一切せず、道連れあらば少しおくれ一人黙々として歩くがよい。尤もこれは僕の經驗からいふのであるから、其人々によつていろ／＼違ふことであらう。それから景色にも氣象にも變化なき長道中の退窟な時は句作など思ひ斷つて急ぐ方がよい。若し其地方の人或は農夫樵夫などと落ちあはゞ、何かと其他の氣象産物風俗等に就いて尋ねてゆかば句材を得ること少くはない。

旅行吟としてあつても旅行の際に得た句として特色あるものは少ないものだ。句材を一つもあまさじと讀みこんで並べて居るのが多い。句材は最も有効に用ゐられてこそ其甲斐あれ、何も其地に限つたことのない句材の、しかも其時の作者の感動なり或は氣象なり特別な其時其場にあらざれば決して産れ得ずといふやうの句でない限りは、(又ほんの修練の爲めの句作でない限りは)ありふれた句材は句にせずとも捨て、置くがよいと思ふ。苟も旅行の句といふからは、(作者の個性は自ら期せずして出づるゆゑ別として)其時其場に適切の感じ感想であつて動かし難いといふ點がありがたい。

さういふ句は容易に出来難いと言はるか。それは勿論であるが、名句は其場を離れぬ味あつて、たゞに吟詠したよりも、其場其時節の氣象に觸れて感深からしむるものがある。例へば芭蕉の旅行吟に於ける其地に臨んで一層の感を深からしむるものがある。

五月雨をあつめて早し最上川
閑さや岩にしみ入る蟬の聲

旅行吟の特色は大観にある。大観の句は輪廓的に流れてなか／＼出来難いものである。そのみならず大観し得ることは作者の生得にあるが、生得といつても修練の結果で達することは出来ようが、甚だ困難である。大観の句を得るには、非思量に入らねばならぬ。非思量にして初めて総合的全體的感を受けることが出来る。句材などをコセ／＼拾つてゐてはこの全體的感が其身に迫つて来るものではない。

籠のわたり

鷹の巢の樟の枯枝に日は入りぬ 凡兆

雄神川

奥ふかに巢鷹の鳴くや雄神川 浪花

の如き大観の句のしかも微細の描寫に入つて居る。上乘の句であらう。大観々々とはかり案じても決して大観は得られない。却つて微細の事の大なる背景につらなる點に大観がある。

雪ちるや穂屋の芒の刈り残し 芭蕉

其地の特色を見逃しはしないのである。

宇津山

十圍子も小粒になりぬ秋の風 許六

秋の風ですつかり大きくつゞまれてしまつた。

湖水眺望

唐崎の松は花より臙にて 芭蕉

此句種々の議論はあるが、感の微妙なる點からいつたら非常に鋭敏にして詩思微塵に入るものといつてよい。而して大観の句たるを共はず。

旅中に大観の句が出来なかつたからとて名句は一つもないとはいへぬ。其場に限らぬともよき句を得たのは旅行の資に相違はない。

ひとり大原野のほとりを吟行しけるに田疇
荒蕪して千ぐさの下葉霜をしのぎつれなき
秋の日影をたのみとはつかに花咲たること
あはれ深し

水かれ／＼蓼かあらぬか蕎麥か否か 蕪村

此句などは何處にも見られる圖で前書の必要もない。即其場に限らぬ句といふものである。『乙字俳論集』五四

一——五四四頁

以上の外なほ「柿首問答」「俳諧問答」「葛の松原」等、拾ふべき箴言がいくらかもあるけれども、最早「俳句作法」としては餘りに不釣合な頁を、古人の言葉の爲めに費して來た。それに大體骨子となるべき言葉のあらまは既につくし得たと思ふので、この邊で切上げることとして結論に急ぎたいと思ふ。

第五章 結 論

其の一 以上を要約して

上來縷々述べ來つたことを要約して見ると、要するに俳句は我々の季節々々の感じを詠む文學であり、人生即自然の境涯に於いて生れる詩である。しかしかういへばとて、俳句をつくるには必ずしも自然に親しむ生活をしなければならぬといふのではない。俳句が田園生活にのみあつて、都會生活にないといふのではない。たゞ生活の様式はどようであらうとも、我々が我々の日常生活に於いて、より多く自然に關心する態度、そこから俳句が生れてくるのである。

海や山や野に、常に親昵しつゝある田園の生活は、自然に接するといふ點では人間の生活のうちで最も機會に恵まれてゐる。しかしそれはたゞ外面上のことであつて、内面的に果して農夫のみがよく自然を味ひ、自然を理解してゐるかどうかは俄かに定められないのである。俳句は自然の事物が我々の情趣の象徴となるときのみ、我々にとつて重大な意義をもつものであることは、既に再三述べたところであるが、その意味からいつて田園生活者必ずしも自然詩人であるとはいへないのである。獵師山を見ずの譬へもある通り、一年中土を掘り返してくらしても、その生活をしみく噛みしめて、その情調をほんとに味ふのでなければ、決して詩は生れて來ないのである。

この事は直ちに、埃と煤煙の中に目を送つてゐるやうな都會生活者が、又必ずしも自然詩人たり得ぬものでないこ

との反證になる。即ち常に自然から遮断せられた生活をすればするほど、我々の本能は意識的と無意識的とを問はず却つて自然に親しまうとする。ビルディングの事務机の上に挿された一輪の花、郊外へくと伸びてゆく住宅地、登山スキー等の流行、等、等、何れもさうした都會生活者の自然親愛熱のあらはれでないものはない。かくして飢ゑきつてゐる都會人の自然親愛熱は、ホンの僅かな自然の片鱗によつて、なほよく十分の自然感を味はしめるのである。貧困者ほど錢のありがたさを知ると同じく、都會人は自然に恵まれざるが故に自然の貴さを知るといへる。この點からいつて自然詩人としての還境は、寧ろ田園人よりも都會人の方が、よりめぐまれてゐると見ても差支へないかとさへ思はれる。

しかし俳句が自然詩である以上は、何といつてもやはり自然に、より多く親しむ外、よき俳句を得る道はない。田園人はその生活をよりよく見つめることによつて、都會人は庭に下り立つて、一莖の草花をもよく愛することによつて始めてよき句が生れるであらう。

其の二 責務生活と俳句

かくして俳句は、私共の自然親愛生活の文學的あらはれである。然らば俳句をつくるには自然に浸りきつた生活をしなければならぬかといふに、必ずしもさうでない事は既に述べた。たゞかうした俳句觀を押しつめて行けば、その理想的境涯が、芭蕉や西行のやうに一生を旅に終るやうな生活にあること勿論である。しかし今は芭蕉、西行の時代と時世がちがふ。刻々に押し寄せて來る生存競争の激しさは、私共の生活の上に、少しの餘裕をも與へない。もし

私共が今日、芭蕉や西行の眞似をすれば、私共は忽ち飢餓に迫られねばならないであらうし、延いては日本は亡びてしまふであらう。しかも芭蕉のやうな生活をしたからといつて、必ず誰にでも芭蕉のやうな作品を残し得るとはいへない。又前にも述べたやうに田園生活者必ずしも自然詩人でない事をもつても、俳句の生まれる素因が、私共の生活環境よりも寧ろ生活の態度そのものにあることが肯げよう。恵まれなければ恵まれないほど却つて激しくなる渴仰のころ、そのころをよく用ひて行くことができれば、一莖の鉢花にもよく自然の心を味ふことができようし、食膳に上せられた茄子や胡瓜の一切によつても、十分に大地の香をかぐことができる。しかも私共が地上に栖息する上からは、譬へどのやうな人爲的生活をしようとも、その底には必ず自然が潜んでゐて、少し鋭い觀察を下すことができさへすれば、きつとそこへ觸れることができるのである。

若し俳句に熱中するの餘り、責務生活を忘れるやうな人があるとすれば、それは餘りにはきちがへた態度である。私をして忌憚なくいはしむれば、責務生活を廻避するほどの人は、例へいくら熱心に句作して見ても、結局その作品に大した價値は認められないと思ふ。それは要するに生活の泌み出た生活のあらはれとしての俳句ではなくて、單なる小手先の細工に終るものだからである。私共は俳句をして手工品の仲間に墮したくはないと思ふ。

芭蕉にとつては俳句をつくることが一つの職業であつた。選ばれた天職であつた。それだからこそあつた生活ができもし、又必要でもあつたので、俳諧師芭蕉としては寧ろその職業に忠實であつたのである。しかし私共は、私共の職業に安んじて、そこに生活の重心を置かなければならない。そして折に觸れ、時に際して一句二句をものするが私共にとつては却つて最も理想的な境涯なのである。たゞそこへ出るまでには、小乘的に相當の修業が必要である。

れども、とにかく俳句は結局私共の生活を離れて存在しない。責務に忠實な生活の中から、折々に接觸できる自然のこゝろが、恰も早天に慈雨を得たかの如き歡喜をもつて私共の心をゆり動かす時、そこにはじめて眞の俳句が存在するのである。

俳句は遊戯ではない、暇つぶしのお道楽ではない。眞に眞剣な生活でなくてどうしてよき俳句を産むことができよう。眞剣な生活を生活する爲めには、どうして私共の責務を忘れることができよう。私は繰返していふ、責務生活を廻避するほどの人々に、ロクな俳句ができるものか、と。

其の二 俳句の價値

俳句をつくることが私共の生活にとつて、果してどういふ意義を持ち、どういふ價値をもつか。自然親愛の生活が正しく行はれるとすれば、それはしぜん私共の責務生活に對して、十分の慰安と活力とを與へるであらうから、このことは既に十分明かである。たゞ一般人の俳句に對する考へ方が、依然として月並の境地を出なかつたり、又、かなり新らしい見解を持つてゐるやうな人でも、俳句をもつて生活の外にあると考へ、小手先の手工品をつくることに没頭してゐる爲めに、往々かうした問題が起つて來るのである。

「詩をつくるより田をつくれ」といふ俗諺は、往時の、墮落しきつた漢詩に對する痛烈な皮肉であつて、眞の文藝に對しては何等の權威もない。俳句が月並者流の似而非風流に墮ちない限り、即ち自然靜觀の文學として成り立つ限りは、前にも述べたやうに、よき句をつくるにはよき生活をせねばならず、よき生活をするところには必然的によき田

が得られる筈であるから、上の俗諺は當然、「よき句をつくるにはよき田をつくれ」と改められねばならないのである。かくして俳句をつくり且つ味ふことは、私共の實生活にとつて、かなり重大な意義と價値を持つて來る。

俳句そのもの、價値からいつても、作者の生活が表はれ、ばあらはれるほど面白い。たゞそのあらはれた生活が深く且つ鋭くなければいけないこと勿論であるが、とにかく迂濶に、無反省に、その日／＼に追はれてゐるやうな生活にあつては、到底俳句のやうな文學は生れないのであつて、例へば朝起きて顔を洗ふ一事にしても、うっかり洗つてゐたのでは何等の感銘も得られないが、深く四季の變遷推移に留意する人にとつては、その水のつめたさ加減によつて十分四季の感じをつかむことができ、従つて自然のこゝろに觸れることができる。そして俳句はこゝに出發する文學であるから、要するに俳句は私共の生活をして浮はつた、醉生夢死の世界から、地道な、反省の世界に還られしめてくれるものといふことができる。

水はH₂Oの物質であるとか、花は草木の生殖器に過ぎないと見るやうな態度でもなく、又實生活を離れて、徒らに花鳥風月を賞する、感傷的な所謂隱遁思想でもなく、私共のこの現實の生活にしっかりと根を置いて、そして自然の風物を靜觀する、そこに私共のいふ眞の俳句がある。もとより俳句が藝術である以上、藝術的表現の必要であること勿論であるが、その出發點はどうしても私共の生活に深く立脚しなければならぬのである。

其の四 俳句の研究法

俳句に對する一通りの概念、及び作り方の一斑については、不十分ながら既に明かにし得たと信するが、これから

更に一步を進めて、もう少し深く俳句を研究する方法如何と問うて來ると、そこにはかなりいろ／＼の問題が生じて來る。

一作者——自分は一俳句作者であれば十分なのだから、そんなに深く研究する必要がないと考へるのは、極めて一般の風潮であるけれども、しかしよき作者となるには、やはり相當の修業も積まねばならぬし、又相當の研究もしなければならぬ。況して俳句の修業なり研究なりが、正しく試みられる場合は、それが直ちに私共の人格の修養にもなるのであるから、一俳句にのみ終る問題ではなく、修業研究それ自身十分の意味をもつてゐるのである。

そこで「研究」といつてもそれにはどこまでも創作に資する研究と、どこまでも研究の爲めにする研究との二つがあり、又見方によつては本質研究と歴史研究とに分けることができる。しかし茲には作家の爲めに必要のことだけ述べればよいわけであるから、以下少しく作家の爲めの研究方法の一斑について考へて見たいと思ふ。

其の五 自然を見ること

自然といつても俳句に扱はれるそれは主として季節々々の感じ、若しくは季節感を十分に伴ふ事物の謂であるけれども、とにかく第一章でも述べたやうに、俳句は私共の季節感に出發するものであるから、第一に季節の推移についてよほど敏感にならなければならぬ。草木の姿であるとか、天候の變化などにも細かな觀察を怠らず、又食物、衣服調度なども、できるだけ季節々々に適したものを着るやうにして、私共の季節感を豊富にしなければならぬ。料理屋などへいつて並べられた御馳走を見ると、いつでも先走つたものか時候外れの、價としては最も高いであらう

品が出されてゐるが、私はさういふものをいつても美味しいと思つてたべた事がない。一月のはじめに細いみじめな胡瓜の、香りも何もない香の物をたべたり、まだ雪のちら／＼する中に味もそつけない筍をたべさせられたりしたのは物珍らしいといふ意外胡瓜や筍の本性は少しも感じられない。それよりも所謂旬しゆんに入つて、あり餘るほど出盛る時分、貧厨に豊富に上せられるものゝ方がどれほどうまいか知れないと思ふ。

それからものゝ名を覺えることも必要である。書物や話の上だけで名を知つてゐて、實物がどんなものかはずきり判らなかつたり、或は實物は日常見てゐながら、その名稱を知らなかつたりする例はいくらもある。さういふ場合に折角感興を催しながら、名を知らぬ爲めに外へ向つて表現できないやうな事がある。「歳事記」といふものはさういふ場合にはじめて必要が生じて來るわけである。動植物などについては、「植物圖鑑」「動物圖鑑」の類など備へて置くことができれば歳事記よりも更に便利であるが、しかしものゝ名稱といふものは必要なものだけは大概ついてゐるもので、少し細かな注意を拂へば、常識だけでも殆ど差支へないと思ふ。そして同じ觀察をしても、ものゝ情趣を掴むことを心掛くべきで畫家は色と形を主として觀察し、科學者は科學的に觀察するけれども、詩人は、情趣情調を主として、それ／＼のものゝ持味を味はなければならぬ。例へば藤の花のおぼろ／＼とした夢のやうな感じをしつかり掴んでゐなければ、芭蕉の「くたびれて」の句はつひにできなかつたにちがひない。

次にものゝ變化、——動植物でいへば生態的觀察も必要である。葉のすつかり落ちてしまつた冬木に對して、凡そ何の木であるといふ見當をつけることも必要であるし、まだ出かゝつた草の芽などに對しても何の芽であるかを知るやうでなければならぬ。小鳥などはそれ／＼に轉る時期があり、蟬なども種類によつて大概順序よく鳴くものであ

る。さういふ事に對して迂濶な觀察をしてゐると、他人の句を味ふ場合にも差支へるし、又折々は時期をとりちがへた句をつくるやうな結果にもなる。よく月が出て雲の峰が見えるといふやうな句を見かけることがあるが、これなどは空想でつくつたものか或は觀察が粗雑なので、雲の峰は夕方にはあとかたもなく崩れてしまふのが例である。

要するに俳人は、日常生活にあつても、人一倍さうした周囲の事物に細心の注意を拂つて、よく觀察しなければならぬ。それは勿論よき句を得る爲めではあるが、又、おのづから私等の精神生活を廣く且つ深くするものである。

其の六 言葉を知ること

もの名稱を知らなければ、これを外へ發表することができなると同様に、自分の感じをいひあらはすべき適當な言葉を知らなくては、折角の情趣もこれを他人に傳へることは困難である。用語の必要については既に「表現」の項で述べたが、この意味で現代使用されてゐる言葉はもとよりのこと、古文學などを讀過する際に常に深く留意して、なるべく語彙を豊富にしなければならぬ。そしていつでも折に觸れ時に際して自ら用ひることのできるやうに一語一語のはんとの意味をしつかり理解しなければならぬ。それにはやはり、文法の素養もかなりの程度まで必要であるし古文讀解の力も大切である。子規は、遇ふ人毎に、俳句を作るには學問をしなければだめだといつたさうであるが、どんな天才であつても、表現すべき道具を持たなければその才を發揮するによしなわけである。しかもその道具の鈍な、平凡なものより、鋭い、すぐれたものである方がすべてに置いて都合のよい事はいふまでもない。俳句が言語藝術として、言葉によつて成立つ詩であることを筆記して、國語國文の研究に意を注ぐことは、俳句を深く極める上に

に缺くことのできない緊要事である。

其の七 形式其他

國語の研究には、必然的に伴ふ筈であるが、國語の持つ音韻的特徴が俳句にどういふ影響をもたらすか、字脚の組合せに依る、俳句の表情、延いては五・七・五、十七字の根據なども、なるべく各自に研究考察して、形式方面の知識をも纏めて置く必要がある。尤もかうした問題を深く研究する事になると、國語學は勿論、言語學、音聲學などの一通りの知識が必要となつてくるけれども、それは餘りに専門的になるから、作家としてはホンの常識的のことだけでよいであらう。そして原理よりも應用の方が端的に必要なのであるから、専門的に調べて見ようとされる方は別として、普通には例句の少しも集めて、極く大體の考察を加へて見る程度でよいと思ふ。甚だ不十分ではあるが、拙著「俳句の考へ方」の中にはさういふ問題の一端を扱つてある。

其の八 古俳句を味ふこと

あながち古句と限つたことではないが、先人の句を味ふといふことは非常に大切である。芭蕉時代、蕪村時代、子規時代、乃至子規以後今日までの俳句が、大體どんな風に動いて來たか、さういふことを知るのも必要であるし、又古俳人がどういふ境地を道破してゐるか、誰はどういふ長所を持ち、誰はどういふ短所を持つてゐるか、なども一通りは明かにせねばならぬ。それも他人の論評をあてにするやうなことをせず、なるべく自分の俳句觀を標準として、

自ら古俳句を味讀しなければならぬ。

一體味ふといふことはつくることよりも或る場合必要でもあり、又遙かに興味のあるものである。自然に直面してその情趣を味ふことは直接経験を廣めて端的に句作に資する點で必要であるが、先人の残した名句を味ふことはその見方を示し、ものゝ情趣の味はひ方を教へてくれる、即ち間接に私共の句作境を廣め深める點で必要なのである。のみならず、自分が嘗て企圖して成功しなかつた表現、或る境地をあらはさうとして、どうしてもあらはし得なかつた場合などを、古句に於いていかにも易々となし遂げてゐるやうな場合もあるし、又私共の夢にも知らなかつた境地を、十分に詠みこなしつたりしてゐて、常に苦心してゐればゐるほど、びつくりさせられるやうな事が往々ある。もちろん一句々々をお手本として、摸倣の資料として古句を見るが如きは、殆ど意味のないことで、寧ろ弊害百出するけれども、間接に自分の句作境を培ふ意味での讀句は、私共の自然の見方を正し、深め、且つ感受力を益々するべくしてくれる。下手な句を十句作るよりも、すぐれた一句をほんとうに味解する方が、時に私等の句境を開いてくれる場合があるのである。

其の九 歴史研究

古句を味ふことが稍進んで來ると、そこには必然的に歴史の研究が要求されて來る。芭蕉時代の作品を味ふ上にはやはり芭蕉やその門下の大體の傾向であるとか、時代的影響、個人々々の傳記性癖など一通りは呑み込んでゐなければならなくなる。しかしこの方は自らさういふ事實を調べるとなると、殆ど専門的になるし、又俳句そのものを評論

する場合とちがつて、どこまでも學術的に扱はれ得る「事實」が主であるから、作家としては各専門家の研究にまつて、その結論だけを取入れればよいわけである。

由來俳句の研究も、その本質論的研究の方面では現在殆ど見るべきものはなく、僅かに子規以後、乙字の諸論を見るのみである。これに反して歴史的研究の方面では最近非常な勢で發展して來て、纏つた俳諧史の得られるのもさう遠いことではあるまいと思ふ。これは藤村博士などが、國文學界に俳句研究を唱導したのに端を發して、現在では専門學校大學などで俳諧史の講座のない學校は殆どない位になつてゐる。従つて大學の卒業論文に俳諧に關するものが毎年相當の數に上るといふやうな事も聞いてゐるが、とにかく歴史研究の方は一つの「學問」として扱ひ易いものと、それに教師としての職業にも多少關係がある爲めに、非常な勢で發達してゐる。ところが本質論の方は、先づすぐれた作家——詩人——であることを要求し、その上に犀利な、緻密な、理論的考察をなし得る素質が必要である爲め、かなり困難であるのと、それに衣食の道が開けぬ爲めに専門的に没頭することのできないのが原因して、相不變子規の淺薄な研究以外に、何等見るべきものがないといふ現狀である。

そして研究家は研究家としての立場にのみ没頭し、作家は作家としての境涯にのみ立籠つて、互に孤立してゐる爲めに作家側の所論には歴史的考察の缺けた獨斷が多く、所謂學者側の歴史的には本質的になつてゐない價值批判が少くない。従つて私共が歴史研究の結論を取入れるにしても、その事實の上の考證的方面では十分に信頼することができても、一步價值批判の問題に觸れてくると、遽かに受入れることのできないやうな場合がしばしばある。

しかし學者側の研究も、その歴史的方面が一段落をつけると同時に、本質論の方面へも追ひ／＼に手が伸ばされる

であらうし、又作家側からもだん／＼研究熱が盛んになつて、有爲な人々が輩出するであらうから、俳句の研究も早晩大成されるものと思はれる。そして私共は、さうしたあらゆる研究を基礎として、なるべく無駄な労力を省き、一途に正しい俳句への道へ突き進むことのできる日を近き將來に期したいと思ふ。従つて一作家であつても、さうした學問的研究の結論を受け入れるだけの用意は十分に備へておなければならぬと思ふ。(完)

昭和五年六月九日印刷
昭和五年六月十三日發行

【非賣品】

東京市外西大久保一三六

編輯者 伊東月草

東京市日本橋區通三丁目五ノ二

發行者 青野喜作

東京市神田區猿樂町二ノ一

印刷者 加藤鎌次郎

東京市日本橋區通三丁目五ノ二

發行所 俳句講座刊行會

振替東京七九〇六〇番
電話(24)三〇八八番

61
5

THE UNIVERSITY OF CHICAGO
LIBRARY
540 EAST 57TH STREET
CHICAGO, ILL. 60637
U.S.A.

611
5

